



Special Features / Engineering's Heritage III Beyond the Years of our Life India

# イスラム様式の華麗な墓廟庭園「タージ・マハル庭園」

## インド・アグラ



TAKAUCHI Ken

特集  
土木遺産III  
悠久の時を超えて インド

株式会社 片平エンジニアリング 道路・環境部/道路技術1課  
竹内 研  
TAKAUCHI Ken

### 1—タージ・マハルの概要

タージ・マハルは第5代ムガル帝国皇帝であったシャー・ジャハーンが、最愛の妻ムムターズ・マハルのために作った白亜の墓廟と、その前に広がるイスラム様式のチャハルバグ(水路により4分割された庭園)からなる墓廟庭園であり、1631～1653年の22年の歳月をかけて、



■写真1—月夜のタージ・マハル

当時の首都であったアグラのヤムナ河畔に建造された。

タージ・マハルほどロマンチックなイスラム様式の施設が他に在るだろうか。この墓廟庭園はシャー・ジャハーンが妻と最後にした3つの約束(1.今後結婚はしない。2.妻の記念館を作る。3.最後の息子をアグラの支配者とする)を果たすために作ったものである。またシャー・ジャハーンは自分のために同じ形の墓廟庭園を、ヤムナ川の対岸に黒大理石で作し、白のタージ・マハルとを橋で結ぶ計画であったという伝説がある。

イスラム様式の最高傑作といわれる白亜の墓廟、その前面にある樹木の緑と歩道の赤と水路の青が織り成す幾何学文様の庭園は非常に美しく、ロマンチックな伝説もあり、タージ・マハルには毎年60万人以上が見学に訪れる。

### 2—イスラム様式の庭園

ムガル帝国は始祖バーブルがティムールの血を引くトルコ系のイスラム王国である。そしてその庭園は、砂漠



■写真2—フーマユーン廟



■写真3—フーマユーン廟の庭園



■写真4—フーマユーン廟の噴水

の民であるイスラム教徒の憧れである緑陰と果実、そして水が大切な要素となっている。

イスラム様式の庭園の特徴は、チャハルバグと言われる4本の水路により分割された庭園である。この4本の水路と果実のなる木はコーランに描かれた楽園のイメージ、「主を畏れる者に約束されている楽園を描いてみよう。そこには腐ることのない水を湛える川、味の変ることのない乳の川、飲む者に快い(美)酒の川、純良な蜜の川がある。またそこでは、凡ての種類の実と、主からの御赦しを賜わる。\*1)を具現化したものである。さらに、正方形に非常にこだわり、幾何学的な規則性と対象性を持たせている。建物等に使われる素材も、ペルシアブルーのタイルではなく赤砂岩と白大理石である。

### 3—イスラム式墓廟庭園の歴史

タージ・マハルで完成したとされるインドでのイスラム様式墓廟庭園は、デリーにあるフーマユーン廟(1573年竣工で世界遺産)に始まる。フーマユーン廟は第2代ムガル皇帝フーマユーンの死を悼み2人の妻(ハジ・ベガムとベラ・ベガム)が作った墓廟庭園である。

この後、第3代皇帝であるアクバル大帝を祭った廟であるアクバル廟、第4代皇帝ジャハーンギール帝の妻であるヌール・ジャハーンが両親の墓廟として作ったイティマッド・ウイダウラ廟、シャー・ジャハーンが作ったジャハーンギール廟、そしてタージ・マハルへと続く。このうちタージ・マハル以外では墓廟が正方形の庭園の中央に建設されている。

フーマユーン廟を例にとると、正方形の庭園を赤砂岩の歩道と細い水路で4つの正方形に分割されており、その正方形を歩道と水路でさらに正方形に4分割している。この16分割された正方形の庭園の中央に墓廟が建てられている。また水路の交差部には木陰と噴水があり、水辺の涼しさを醸し出している。庭園には若干の樹木と芝が植えられており、赤砂岩を基調とした建物とのコントラス



■写真5—タージ・マハルの正面

トが非常に美しい。

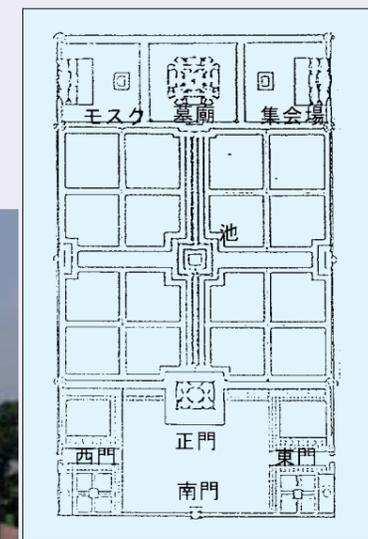
美しく整備された広大な庭園とその中央に建てられた墓廟は、その時の権力を誇示すると共に、死者が楽園の中心で心安らかに暮らしていけるよう、願いが込められているようである。

### 4—タージ・マハル庭園

シャー・ジャハーンの生涯は戦いの連続であった。17歳で結婚したムムターズ・マハルは、常にシャー・ジャハーンに随って戦場に行き、36歳で亡くなるまでの19年間で17回妊娠し、14回出産した。この14回目の出産の後、ムムターズ・マハルは産褥で亡くなってしまふ。

戦地で妻を亡くし失意のシャー・ジャハーンであったが、戦争には勝利し1年後アグラに戻ってきた。このとき彼は建物について今で言うデザインコンペを実施し、建築の指揮をアマナー・カーン・セルジーに委ねる。庭園はシャー・ジャハーンが自ら総指揮を取り、この世にイスラム教の楽園を再現しようとした。

庭園のレイアウトは、長方形の庭園の中央に正方形のチャハルバグを配置し、北側には墓廟を中心としてモスクと集会所の建築物、南側には正門と前庭そして128室の部屋が配置されている。庭園は大きな水路と赤砂岩の歩道で区切られたチャハルバグであり、その中心には白大理石の池が設けられている。この水路の中央には噴水が連なっており、水路の広さと



■図1—タージ・マハルのレイアウト



■写真6—中央の池とタージ・マハル



■写真7—水路の噴水



■写真8—中央の池の噴水

噴水の多さに、フーマユーン廟建設から80年間の技術の進歩がうかがえる。更にこの噴水は建設当初のものが今でも立派に機能している。

現在の庭園も水路と樹木が幾何学的かつ対照的に整備されており、水辺に心地よい木陰を提供している。庭園に植えられている樹木は、サイクロス、白檀等が多く、建設当初に植えられたと考えられる果実の木は1本も植えられていない。なお現在は芝が植えられているが、建設当初芝は無かったと考えられている。

建物はイスラム建築の集大成であり、赤砂岩の基壇の上に白大理石でイスラム建築の特色であるドーム、ミナレット、アーチを対称的に配置し、安定感を与えている。遠くからだと白い大理石の壁面に見えるが、近くで見ると壁一面に珊瑚石、瑪瑙、瑠璃等を用いた象嵌細工や、大理石の浮かし彫りや透かし彫りが施されている。

シャー・ジャハーンはなぜ墓廟の左右に、モスクと集会所（もちろん墓廟を軸とした対称形）を建築したのだろうか。これは、ヤムナ川の川岸にある軟弱な地盤上に墓廟を建設するため、建物が不等沈下しないように墓廟に先立ち施工された、押さえ盛土ならぬ押さえ建物だったとの説もあるが明確な資料は残っていない。

タージ・マハルの建設には22年の歳月を費やした。

様々な宝石類を用いた細密な象眼細工、浮かし彫りや透かし彫り等の凝った細工の建物本体、ヤムナ川の川岸に建物を構築したために必要な基礎工事等、建物自体に非常に長い年月が必要であったが、それにしても長い。これはシャー・ジャハーンが同時期にアグラ城の改築、デリーへの首都移転（現在のオールドデリー）を行っており、ラール・キラー（別名、レッド・フォート）の建設、さらには現在においてもインドで最大級のイスラム教モスクであるジャマー・マスジッドも建設していた。このため、人材・資材を分散せざるを得なかったと考えられている。

ではなぜタージ・マハルだけが庭園の北側に墓廟が建てられたのか？

このことに関する記録は無い。しかし楽園の北側に光り輝く神の玉座。これがシャー・ジャハーンのイメージしたタージ・マハルの基本構想だといわれる。このため豊かな緑陰と果実、そして水を備えたチャハルバグ、その北側に眩しいほどに輝く白い大理石の墓廟を作ったのではないか。このため、タージ・マハルは他のインドにあるイスラム様式の墓廟庭園とは異なり、墓廟を庭園の北側に配置したと考えられる。

建設当初、建物を飾っていた無数の宝石・貴金属類はムガル帝国が衰退した後にアグラを征服したインドの諸部族及びイギリスに全て奪われてしまった。タージ・マハル



■写真9—墓廟の上から南門を望む



■写真10—墓廟の装飾



■写真11—壁面にある花模様の象嵌細工



■写真12—壁面にある草花の浮かし彫り



■写真13—墓廟の西に建つモスク



■写真14—正門から墓廟を望む



■写真15—ASIの運行する電気バス

の建物も英国統治時代にオークションにかけられたが、さすがに買い手が見つらず現在に至っている。

### 5—現在のタージ・マハル

現在のタージ・マハルはASI (Archaeological Survey of India インド考古学調査局)により管理、運営されている。ASIは非常に広範囲な権限を持っており、庭園・建物の維持・管理ばかりではなくテロからの防御を含むセキュリティ、環境アセスメントの実施と改善策の立案等も含まれている。このため、タージ・マハルの周辺500mはガソリン車の通行が禁止され、駐車場からASIが運行する電気バスに乗り換える必要がある。

また、タージ・マハル、アグラ城、アクバル廟等ムガル時代の歴史的な建築物が多く残るアグラのASIは、アセスメントを行うと共に、工場の禁止地域の策定、工場の移転を求める裁判を行っている。

テロ及び火災の被害を受けないために、火気（マッチ、ライター、タバコ等）と携帯電話、懐中電灯等も持込が禁止されており、タージ・マハルに入る前に金属探知機とボディチェックによる身体検査が行われている。

タージ・マハルはヤムナ川の南岸、庭園の北側に廟が建っている。もともと花の庭園であった場所に立てられた。またヤムナ川の対岸に今も残る城壁の先は果実の庭園であった。ASIは、ヤムナ川の対岸に、ムガル時代

と同様の果実の木を植林しており、近い将来には果実の庭園が再現されるはずである。

現地における取材でも、シャー・ジャハーンが自分のために作ろうとしたという伝説の、黒い大理石のタージ・マハルを裏付ける資料は出てこなかった。是非見てみたい風景であり、人々の願望がこんな伝説を生んだのであろうか。

シャー・ジャハーンは1658年に、タージ・マハルの完成後5年で息子のアウラングゼーブに帝位を奪われる。その後1666年に亡くなるまでの8年間をアグラ城に拘束され、タージ・マハルを眺めるだけの寂しい晩年であった。

現在タージ・マハルの墓廟の中央にはムムターズ・マハルの棺が安置されており、その横に寄りそうようにシャー・ジャハーンも安置されている。

※1：日本ムスリム情報事務所のHP 47.15 (<http://www.isuramu.net/>)

〈参考文献〉

- 1) タージ・マハル物語 渡辺建夫著
- 2) 楽園のデザイン ジョン・ブルックス著、神谷武夫訳
- 3) ムガル美術の旅 山田篤美著

(写真提供：P34上、1、ASI 10、14、初芝成應 2～9、11～13、15、16、筆者)



■写真16—ヤムナ川の対岸